

## 処方秘箋

泉鏡花作

一

此の不思議なことのあつたのは五月中旬、私が八歳の時、紙谷町に住んだ向うの平家の、お辻といふ十八の娘、やもめの母親と二人ぐらし。少しある公債を便りに、人仕事などをしたのであるが、つゝまやかにして、物綺麗に住んで、お辻も身だしなみ好く、髪形を崩さず、容色は町々の評判、以前五百石取りの武家、然るべき品もあつた、其家へ泊りに行つた晩の出来事。家も向ひ合せのことなり、鬼ごつこにも、■はじきにも、其家の門口、出窓の前は、何時でも小兒の寄合ふ處。次郎だの、源だの、六だの、腕白どもの多い中に、坊ちゃん／＼と別ものにして可愛がるから、姉はなし、此方からも懐いて、ちよこ／＼と入つては、縫物を交返す、物差で刀の眞似、馴ッこになつて親んで居たけれども、泊るの  
は其夜が最初。

西にしの方かたに山やまの見みゆる町まちの、上かみの方かたへ遊あそびに行いつて居ゐたが、約やく束そくを忘わすれなかつたから晚ばん方がたに引ひ返かへした。之これから夕ゆ餉ふけを濟すましてといふつもり。

小こ走はしりに駆かけて來くると、道みちのほどこ一ち町やうた足たらず、屋やならび三十さんばかり、其その山やま手ての方ほうに一けん軒けんの古ふる家いへがある、丁ちやうど其そ處こで、兎うのやうに匆はねたはずみに、礫こいしに躓つまずいて碯はたと倒たふれたのである。

俗ぞくにいふ越え後ごは八は百ひゃく八やち後ご家け、お辻つじが許とこも女をんなぐらし、又また海うみ手ての二にかい階かい屋やも男をとこ氣けなし、棗なつめの樹きのある内うちも、男をとこが出入で入いりをするばかりで、年とし増まは蚊か帳やが好すきだといふ、紙かみ谷や町まち一ちやう町まちの間あひだに、四けん軒けん、いづれも夫をとこなしで、就な中かんづ今いま轉まんだのは、勝か手ての知しれない怪あやしげな婦をんな人なの薬くすり屋やであつた。

何いづ處こも同おなじ、雪ゆき國くにの薄うす暗くらい屋や造くりであるのに、廂ひさしを長ながく出だした奥おく深ふかく、煤すすけた柱はしらに一枚まい懸かけたのが、薬くすりの看かん板ばんで、雨あめにも風かぜにも曝さらされた上うへ、古ふるび切きつて、蟲むしばんで、何なんといふ銘めいだか誰たれも知しつたものはない。藍あゐを入いれた字じのあとには、斷きれ々／＼になつて、恰あたも青あをい蛇へびが、渦うずき立たつ雲くもがくれに、昇し天てんをする如ごとく也なり。

別に、風邪薬を一貼、凍傷の膏薬一貝買ひに行つた話は聞かぬが、春の曙、秋の暮、夕顔の咲けるほど、爐の櫓の消ゆる時、夜中にフト目の覺むる折など、町中を籠めて芬と香ふ、濕めばい風は薬屋の氣勢なので、恐らく我國の薬種で無からう、天竺傳來か、蘭方か、近くは朝鮮、琉球あたりの妙薬に相違ない。然う謂へば彼の房々とある髪は、なんと、物語にこそ謂へ目前、解いたら裾に靡くであらう。常に其を、束ね髪にしてカツシと銀の簪一本、濃く且つ艶かに堆い鬢の中から、差覗く鼻の高さ、頬の肉しまつて色は雪のやうなのが、眉を拂つて、年紀の頃も定かならず、十年も昔から今にかはらぬといふのである。

内の様子も分らないから、何となく薄氣味が悪いので、小兒の氣にも、暮方には前を通るさへ駆け出すばかりにする。眞晝間、向う側から密と透して見ると、窓も襖も閉切つて、空屋に等しい暗い中に、破風の隙から、板目の節から、差入る日の光一筋二筋、裾廣がりにはぱつと明く、得も知れぬ塵埃のむら／＼と立つ間を、兎もすればひら／＼と姿の見える、

婦人の影。

轉びんで手をつくると、はや薬の匂がして膚を襲つた。此の一町がかりは、軒も柱も土も石も、残らず一種の香に染んで居る。

身に痛みも覚えぬのに、場所もこそあれ、此處はと思ふと、怪しいものに捕へられた氣がして、わつと泣き出した。

「あれ危い。」と、忽ち手を伸べて肩をつかまへたのは彼の婦人で。

其の黒髪の中の大理石のやうな顔を見ると、小さな者はハヤ震へ上つて、振ニらうとして身をあせつて、仔雀の羽うつ風情。

怪しいものでも聲は優しく、

「おゝ、膝が擦剥けました、薬をつけて上げませう。」と左手には何うして用意をしたらう、既に薰の高いのを持つて居た。

守宮の血で二の腕に極印をつけられるまでも、膝に此の薬を塗られて何うしよう。

「厭だ、厭だ。」と、しやにむに身悶して、聲高になると、

「強情だねえ、」といったが、漸と手を放し、其のまゝ駆出さうとする耳の底へ、

「今夜、お辻さんの處へ泊りに行くね。」

といふ一聯の言を刻んだのを、今に到つて

忘れない。

内へ歸ると早速、夕餉を濟し、一寸着換へ、絲、  
犬、錨、などを書いた、讀本を一冊、草紙のやうに  
引提げて、母様に、帯の結目を丁と叩かれると、直  
に戸外へ。

海から颯と吹く風に、本のペエジを亂しながら、  
例のちよこ／＼、をばさん、辻ちゃんと呼びざまに、  
からりと開けて飛込んだ。

人仕事に忙しい家の、晩飯支度は遅く、丁ど御膳。  
取附の障子を開けると、洋燈の灯も朦朧とするばかり、  
食物の湯氣が立つ。

冬でも夏でも、暑い汁の好だつたお辻の母親は、  
むんむと氣の昇る椀を持ったまゝ、はてつた顔をし  
て、

「おや、おいで。」

「大層おもたせぶりね、」とお辻は箸箱をがちり  
と云はせる。

母親もやがて茶碗の中で、さら／＼と洗つて塗箸  
を差置いた。

手で片頬をおさへて、打傾いて小楊枝をつかひながら、皿小鉢を寄せるお辻を見て、

「あしたにすると可いやね、勝手へ行つてたら坊ちゃんも淋しからう、私は直ぐに出懸けるから。」

「然うねえ。」

「可いよ、可いよ、構やしないや、獨で遊んでら。」と無雑作に、小さな足で大胡坐になる。

「ぢや、まあ、お出懸けなさいまし。」

「大人しいね。感心、」と頭を撫でる手つきをして、

「どれ、其では、」楊枝を棄てると、やつとこさと立ち上つた。

お辻が膳を下げる内に、母親は次の佛間で着換へる様子、其處に箆笏やら、鏡臺やら。

最一ツ六疊が別に戸外に向いて居て、明取が皆で三間なり。

母親はやがて、繻子の帯を、前結びにして、風呂敷包を持つて顯れた。お辻の大柄な背のすらりとしたのとは違ひ、丈も至つて低く、顔容も小造な人で、髪も小さく結つて居た。

「それでは、お辻や。」

「あい、」と、がちや／＼いはせて居た、彼方の  
勝手で返事をし、襷がけのまゝ、駈けて来て、

「氣をつけて行らつしやいませよ。」

「坊ちゃん、緩り遊んでやつて下さい。直ぐ寝つ  
ちまつちやあ不可ませんよ、何うも御苦勞様なこと  
ツたら、」とあとは獨言、框に腰をかけて、足を  
突出すやうにして下駄を穿き、上へ蔽かぶさつて、  
沓脱越に此方から声をあけるお辻の脇あけの下あた  
りから、つむりを出して、ひよこ／＼と出て行つた。  
渠は些と遠方をかけて、遠縁のものゝ通夜に詣つた  
のである。其がために女が一人だからと、私を泊め  
たのであつた。

枕まくらに就ついたのは、良よほど過すぎて、私わたしの家ちなの職人衆しよくにんしうが平時いっもの湯ゆから歸かへる時分じぶん。三人にんづれで、聲高こわだかにものを言いつて、笑わらひながら入はいつた、何どうした、など、言いふのが手てに取とるやうに聞きこえたが、又また笑聲わらひこゑがして、其それから寂然ひっそり。

戸外おもての方は騒さわがしい、佛間ぶつまの方かたを、とお辻つじはいつたけれども其方そつちを枕まくらにすると、枕頭まくらもとの障子しやうじ一重ひとへを隔へだて、中庭なかにわといふではないが一坪ひとつぼばかりのしつくひ叩たたきの泉水せんすゐがあつて、空そらは同一おなじほど長方形ちやうほうけいに屋根やねを抜ぬいてあるので、雨あめも雪ゆきも降ふりこ込こむし、水みづが溜たまつて濡ぬれて居ゐるのに、以前いぜん女髪結をんなかみゆひが住すんで居ゐて、取散とつちらかした元結もとゆひが化なつたといふ、足卷あしまきと名なづける針金はりかねに似にた黒くろい蚯蚓みづずが多いから、心持こころもちが悪わるくつて、故わけと外そとを枕まくらにして、並ならんで寝ねたが、最もう夏なつの初はじめなり、私わたしには清きよらかに小搔卷こかいまき。

寝ねる時とき、着換かへて、と謂いつて、女むすめの浴衣ゆかたと、紅あかい扱帯しこぎをくれたけれども、角兵衛獅子かくへゑししの母衣ほろではなし、母様おつかさんのいひつけ通りどほ、帯おびをしめたまゝで横よこになつた。

お辻つじは寒さむさをする女むすめで、夜具やぐを深ふかく被かけたのであ

る。

唯顔を見合せたが、お辻は思出したやうに、莞爾して、

「さつき、駆出して来て、薬屋の前でころんだのね、大な形をして、をかしかったよ。」

「呀、復見て居たの、」と私は思はず。

之は此の春頃から、其まで人の出入さへ餘りなかつた上の薬屋が方へ、一人の美少年が来て一所に居る、女主人の甥ださうで、信濃のもの、繼母に苛められて家出をして、越後なる小母を便つたのだと謂ふ。

此のほどから黄昏に、お辻が屋根へ出て、廂から山手の方を覗くことが、大抵日毎、其は二階の窓から私も見た。

一體裏に空地はなし、干物は屋根でする、板葺の平屋造で、お辻の家は、其真中、泉水のある處から、二間梯子を懸けてあるので、悪戯をするなら小兒でも上下は自由な位、干物に不思議はないが、待て、お辻の屋根へ出るのは、手拭一筋棹に懸つて居る時

には限らない、恰も山の裾へかけて紙谷町は、だら／＼のぼり、斜めに高いから一目に見える、薬屋の美少年をお辻が透見をするのだと、内の職人どもが言を、小耳にして居るさへあるに、先刻轉んだことを、目のあたり知つて居るも道理こそ。

呀、復見て居たの　　といったは其の所為で、私は何の氣もなかつたのであるが、之を聞くと、目をばつちりあげたが顔を赧らめ、

「厭な！」といつて、口許まで天鵝絨の襟を引かぶつた。

「そして轉んだのを知つてるの、をかしいな、辻ちゃんも轉んだのを知つてるし、彼のをばさんは、私の泊るのを知つて居たよ、皆知つて居ら、をかしいな。」

#### 四

「え！」と慌しく顔を出して、まともに向直つて、じつと見て、

「今夜泊ることを知つて居ました？」

「あゝ、整と然う言つたんだもの。」

お辻は美しい眉を顰めた。燈火の影暗く、其の顔寂しう、

「恐しい人だこと、」といひかけて、再び面を背けると、又深と夜具をかけた。

「辻ちゃん。」

「。」

「辻ちゃんてば、」

「。。。」

「よう。」

こんな約束ではなかつたのである、俊徳丸の物語のつゞき、それから手拭を藪へ引いて行つた、踊をする三といふ猫の話、それもこれも寝てからといふのであつたに、詰らない、寂しい、心細い、私は歸らうと思つた。丁ど其時、どんと戸を引いて、かた

りと鎖をさした我家の響。

胸が轟いて搔卷の中で足をばた／＼したが、堪らなくツて、くるりとはらばひになつた。目を開いて耳を澄すと、物音は聞えないで、却て戸外なる町が歴然と胸に描かれた、暗である。駆けて出て我家の門へ飛着いて、と思ふに、夜も恁う更けて、他人の家からは勝手が分らず、考ふれば、毎夜寐つきに聞く職人が湯から歸る跽音も、向うと此方、音にも表裏があるか、様子も違つて居た。世界が變つたほど情なくなつて、枕頭に下した戸外から隔ての音が、厚さ十萬里を以て我を圍ふが如く、身動きも出来ないやうに覺えたから、これで殺されるのか知らと涙ぐんだのである。

ものゝ懸念さに、母様をはじめ、重吉も、嘉藏も呼立てる聲も揚げられず、呼吸さへ高くしてはならない氣がした。

密と見れば、お辻はすや／＼と絲が揺れるやうに幽な寐息。

これも何者かに命ぜられて然かく寐入つて居るら

しい、起してはならないやうに思はれ、ア、復横になつて、足を屈めて、目を塞いだ。

けれども今しがた、お辻が（恐しい人だこと、）といつた時、其の顔色と、もに灯が恐しく暗くなつたが、消えはしないだらうかと、いきなり電でもするかの如く、恐る／＼目をあけて見ると、最う眞暗、灯はいつの間にか消えて居る。

はツと驚いて我ながら、自分の膚に手を觸れて、心臓をしつかと壓へた折から、芬として薫つたのは、橋の音信か、あらず、佛壇の香の名残か、あらず、ともすれば風につれて、隨所、紙谷町を渡り來る一種の藥の匂であつた。

しかも梅の影がさして、窓がぼつと明るなる時、縁に蚊遣の摩く時、折に觸れた今までに、其夜の如く香の高かつた事はないのである。

瓶か、壺か、其の藥が宛然枕許にでもあるやうなので、餘の事に再び目をあけると、暗の中に二枚の障子。件の泉水を隔て、寢床の裾に立つて居るのが、一間眞蒼になつて、棧も數へらるゝばかり、黒みを

帯おびた、動うごかぬ、どんよりした光ひかりがさして居ゐた。  
見みる／＼裡うちに、べら／＼と紙かみが剥はげ、棧さんが吹ふッ消け  
されたやうに、ありのまゝで、障しゃうじ子が失うせると、羽は  
目の破やぶれめにまで其その光ひかりが染しみ込こんだ、一坪ひとつぼの泉せんすゐ水を  
後うしろに、立たち顯あられた婦をんな人の姿すがた。

解とき餘あまる鬢びんの堆うすたかい中なかに、端たん然ぜんとして眞ま向むきの、瞬またき  
もしない鋭すどい顔かほは、正まさしく藥くすり屋やの主あるじ婦めである。

唯と見みる時とき、頬ほを蔽おほへる髪かみのさきに、ゆら／＼と波なみ  
立たつたが、そよりともせぬ、裸はだから蠟ろう燭そくの蒼あをい光ひかりを放はなつ  
のを、左ひだり手てに取とつてする／＼と。

其の裳の觸るゝばかり、すつくと枕許に突立つた、私は貝を磨いたやうな、足の指を寝ながら見て呼吸を殺した、顔も冷うなるまでに、室の内を隈なく濁つた水晶に化し了するのは蠟燭の鬼火である。鋭い、しかし媚いた聲して、

「腕白、先刻はよく人の深切を無にしたね。」

私は石になるだらうと思つて、一思に竦んだのである。

「したが私の深切を受ければ、此の女に不深切になる處。感心にお前、母様に結んで頂いた帯をしめたまゝ寝てること、腕白もの、おい腕白もの、目をばちくりして寝て居るよ。」といつて、ふゝんと鷹揚に笑つた。姐御眞實だ、最う堪らぬ。

途端に皮膚の氣勢がしたので、咽喉を嚙れたらうと思つたが、然うではなく、蠟燭が、敷蒲團の端と端、お辻と並んで合せ目の、畳の上に置いてあつた。而して婦人は膝をついて、のしかゝるやうにして、鬢の間から眞白な鼻で、お辻の寐顔の半夜具を引か

ついで膨らんだ前髪の、眉のかゝり目のふちの稍曇  
つて見えるのを、ぞつと覗込んで居るのである。  
おゝ、あはれ、少やかに慎ましい寐姿は、藻脱の殻  
か、山に夢がさまよふなら、衝戻す鐘も聞えよ、と  
念じ危ぶむ程こそありけれ。

婦人は右手を差伸して、結立の一筋も亂れない、  
お辻の高島田を無手と掴んで、づつと立つた。手荒  
さ、烈しさ。元結は切れたから、髪のずるりと解け  
たのが、手の甲に絡はると、宙に釣されるやうにな  
つて、お辻は半身、胸もあらはに、引きされたが、  
両手を疊に裏返して、呼吸のあるものとは見えない。  
爾時、右手に黒髪を搦んだなり、  
「人もあらうに私の男に懸想した。さあ、何うす

るか、よく御覽。」  
左手の肘を鍵形に曲げて、衝と目よりも高く差上  
げた、掌に、細長い、青い、小さな瓶あり、捧げて、  
俯向いて、額に押當て、

「呪詛の杉より流れし雫よ、いざ汝の誓を忘れず、  
目のあたり、験を見せよ、然らば、」と言つて、取  
直して、お辻の髪の根に口を望ませ、

「あの美少年と、容色も一對と心上つた淫奔女、  
いで／＼女の玉の緒は、黒髪と／＼もに切れよかし。」  
と恰も宣告をするが如くに言つて、傾けると、颯  
とか／＼つて、千筋の紅溢れて、絲を引いて、ねば／  
＼と染むと思ふと、丈なる髪はぼつりと切れて、お  
辻は崩れるやうに、寢床の上、枕をはずして土氣色  
の頬を蒲團に埋めた。  
玉の緒か、然らば玉の緒は、長く婦人の手に奪は  
れて、活きたる如く提げられたのである。

莞爾として朱の唇の、裂けるかと片頬笑み、  
「腕白、膝へ薬をこつづかつてくれ／＼ば、私が來  
るまでもなく、此の女は殺せたものを。夜が明ける  
まで黙つて寝なよ。」といひすてにして、細腰楚た  
る後姿、肩を揺つて、束ね髻がざわ／＼と動いたと  
見ると、障子の外。

蒼い光は淺葱幕を拂つたやうに颯と消えて、襖も  
壁も舊の通り、燈が薄暗く點いて居た。

同時に、戸外を山手の方へ、からこん／＼と引摺  
つて行く婦人の跽音、私はお辻の亡骸を見まいとし  
て搔卷を被つたが、案外かな。

抱起だきおこされると眩まはゆいばかりの晝ひるであつた。母親はゝおやも歸かへつて居ゐた。抱起だきおこしたのは昨夜ゆうべのお辻つじで、高島田たかしまだも其そのまゝ、早はやや朝あさの化粧けはひもしたか、水みづの垂たる美うつくしさ。呆あつ氣けに取とられて目めも放はなさないで目詰みつめて居ゐると、雪ゆきにも紛まがふ項うなじを差さしつけ、くつきりした鬚まげの根ねを見みせると、白粉おしろいの薰かきり、櫛くしの齒はも透すきとほ通とほつて、

「島田しまだがお好すきかい、」と唯たゞあでやかなものであつた。私わたしは家いへに歸かへつて後のちも、疑うたがひは今いまに解とけぬ。

お辻つじは十九じゅうで、敢あへて不ふ思し議ぎはなく、煩わづらつて若死わかじにをした、其そのの黒髪くろかみを切きつたのを、私わたしは見みて悚然ぞつとしたけれども、其それは佛教ぶつけうを信しんずる國くにの習し慣くわんであるさうな。

【完】